

第2節 登山道と施設のありかた

吉田口登山道は、富士山北口の登山拠点の一つである吉田（上吉田）から山頂に向かっている。金鳥居の足下に、山梨県は明治40年（1907）に「登山里程元標」を設置した。登山道は上吉田の縦宿から横町へ左折し、大門口から北口本宮富士浅間神社を通って、そこから山頂へ延びている。

大門口から山頂までの登山道に関する、おもに近世以前の信仰施設や山小屋の跡等を、ここでは北口本宮富士浅間神社境内（遺跡）と分別して、それを除いた範囲を吉田口登山道関連遺跡として地点ごとに扱っていくことにする。

登山道関連遺跡の調査は、平成8年（1996）に3回にわたって実施し、馬返から五合目中宮社付近まで、五合目から経ヶ岳・姥ヶ懐、現六合目登山指導センターまで、六合目から頂上までと噴火口を一周する地点の範囲内で表面採集をおこなった。平成9年（1997）は中ノ茶屋周辺を重点的に調査した。表面採集とは別に、文化庁補助事業であるこの「歴史の道（吉田口登山道）整備活用推進事業」にともなう発掘調査成果もあわせて整理して、ここではその概要を述べていく。

ところで、江戸時代後期の地誌である『甲斐国志』は、登山道の基点に、富士山大鳥居を挙げている。そこから驅ヶ馬場までを一つの領域ととらえ、「此ヨリ山上迄鳴物ヲ禁ゼシナリ」とし、古い結界地の認識を提示しており、この鳥居は登山基点の大きな目安とされていたことがわかる。近世になって境内整備が進行し、本殿背後の登山門が登拝の出発点となった。登山門からその先の鈴原、馬返までの行程を約3里（12km）とし、鈴原から頂上までは里数をいわずに合勺をもって数え十合を頂上としている。馬返からの木山の到達点に天地界があり、そこから上は砂石が山をなし、草木が生えない毛ナシというとされる。登山道関連遺跡の中では、合目や勺、個別地点の表記は同書に準拠して記述することにする。

御茶屋（地点）

浅間神社境内を過ぎて、林間を約1km行くと高地の原に出る。この林は諏訪森というアカマツ林で、自然公園になっている。南へ向かってまた1kmばかり進むと小坂となっていて、この地を御茶屋と称していた。江戸時代の『甲斐国志』編纂以前に茶屋等があった場所である。現在は泉瑞への分岐があるのみである。ここから東方へ800mほど行くと泉瑞（遺跡番号51）の湧水がある。また、登山道から西へ約1.2kmで胎内穴（旧胎内）が存在した。なお、「甲斐国志草稿」に諏訪森出土の陶印の図が掲げられる。

遊境 中ノ茶屋（地点）

中ノ茶屋付近は、古くは遊境と称された。この地が顯幽の境にあたるので、この地名は「幽境」からきているものと考えられる。草山三里の認識が定着すると、浅間神社裏の登山門から鈴原、馬返の中間地点にあたることから、ここ遊境にあった小屋を次第に中ノ茶屋と呼ぶようになった。しかし、明治5年（1872）のこの小屋についての二つの証文は、相変わらず「遊境小屋」の名称を使っている。

中ノ茶屋が立地する場所には、近世の地誌類や絵図を見ると、石積の枡形や上・下の冠木門が記されているが、今日では冠木門は現存せず、富士山側に位置する門両袖の土壘状の施設は現存している。

土壘施設の手前、登山道の東側に中ノ茶屋があり、平成6年（1994）に再建された。

登山道は「旗掛ノ松」から小屋（茶屋）の右側を通り、神田ホリ（堀）を越えて、そのまま山頂へ向かって直進する道筋をとっていた。山林中に「左たきぎとり道、右御山のぼり道」と刻まれた石造の道標が残される。現在の登山道（県道）は西側に湾曲して大石茶屋へと向かう。

なお、『甲斐国志』卷之三十四の富士山の条には、中ノ茶屋から五町（約500m）ばかり登ったところに「脱衣婆ノ草堂跡」の礎石が残り、そこを姥子坂と称したと記される。その姥にあたるものが役行者母公倚像（中道町円楽寺蔵）と推定され、中道町では安氣婆というこの像が、ここに祀られていたものと考えられる。「八葉九尊図」はこの付近から樹木を描き、「けなしノさかい」、森林限界までの木立の認識を示している。現地調査では、これらの施設のあった具体的な場所を確認することはできなかった。

『甲斐国志』は、姥子坂からしばらく急傾斜の道が続き、その辺りを驅ヶ馬場と称したとする。浅間社の祭礼に流鏑馬を執行したところで、勝山と下吉田でおこなわれるものはこの神事を移したものとされる。ここから上は鳴物および新神楽所開設の禁止が定められていた。遊境からこの付近まで、三途の川に見立てた空堀、奪衣婆の草堂、驅ヶ馬場と続く俗界と神域（幽界）との境界領域とされていた。室町時代の記録である『勝山記』享禄3年（1530）の条に、「立ノ馬場ノ大日堂炎焼」とある。『甲斐国志』は古木が天を蔽うとし、ここからが木立（樹林帯）であったことを記している。近代初頭の明治8年（1875）には、この付近に立場茶屋（馬場又七）が存在したことになっている。

鈴原 馬返（地点）

山足に迫るところを鈴原、馬返という。おもに江戸の富士講中が馬返の呼称を用いたようである。近世期には、ここには茶屋が4軒存在した。登山門からここまでを草山三里と俗称していた。草山とは、江戸時代、まぐさや肥料にするための草を刈る山で、裾野11ヶ村の入会地であった。中世から近世初頭までの木立の境は、草山を広く利用するために、ここまで後退したことになる。この場所から五合目の天地界までの樹林帯を木山三里という。一般的に、木山とは江戸時代に材木を切り出す山をさすことから、このような境界認識はそれ以降に形成されたことがわかる。

現在でも、馬返には小屋1軒（大文司屋）が存在し、文政9年（1826）建立の石造鳥居が残存している。そのほかにも2ヶ所の小屋跡と目される平場が確認される。登山道（県道）は、明治40年（1907）以降の改修で、急傾斜地を直登するルートから、緩やかな道筋とするために、道を迂回させて鳥居をくぐらないかたちに付け替えられたことがわかる。調査以前にも、この付近の登山道から登拝者、富士道者の撒錢である銅錢が採集された。

歴史の道（吉田口登山道）の整備にともなう事前の発掘調査は、平成9年（1997）から翌10年（1998）の二次にわたっておこなわれた。調査の結果、明治40年以降の登山道（県道）改修前の状況をほぼ解明することができた。鳥居前の階段の一部が明らかになった。現在旧来の階段部は埋め立てられて、そこに迂回路が付けられているが、その下に旧来の石階段1段が埋設保存されていた。鳥居下部は石敷きされ、両側は道幅で石垣が構築されている。

江戸時代の「富士山真景之図」には、鳥居前面に合掌する猿像が一対描かれている。富士山において猿は山の神靈の使いとされ、絵札や牛王に数多く描かれている。鳥居の周辺でこれと同様の合掌す

る猿像が2個体分見つかっている。そのうちの一つが鳥居の沓石に転用された台石にのる猿像に対応することがわかった。

再言になるが、平成12年の付替え以前の登山道は禊所前で左側に卷いて登るルートをとっていた。旧登山道は、鳥居をくぐり禊所の建つ場所を通過して直登していた。禊所の背後には道路の右側に6段、左側に1段の雑壇状に造成された平場が確認されている。そこから一合目鈴原社までの間、2ヶ所の建物跡と推察される平場が残り、いずれも二間×三間規模の建物があつた可能性も考えられる。

一合目 鈴原社（地点）

鈴原社のある場所を一合目とする。鈴原社は古くは大日堂と称され、近世初頭に遡る施設と考えられる。周辺の地形を観察すると、当初の登山道はこの社を目指して直登していたものと思われる。その後、鈴原社を拡充するため、背後の斜面を削平して、北側前面に排土してテラス状の平坦地を造成したようである。そのため、近世後期にはその平坦地に上りあげるために、登山道に階段を設けていた。「富士山明細図」、「富士山真景之図」等に描かれるように、鈴原社（大日社）に向かって真っ直ぐに道者が階段を上りあげ、鳥居をくぐる様子が描かれている。また、境内には、鳥居、手水鉢、小屋、拝殿、本殿と小祠が描かれ、それらの施設が存在したことがわかる。旧来の登山道は、鈴原社の東側を通るよう付けられていた可能性が強い。

平成8年（1996）、13年（2001）の二次にわたって現地での発掘調査をおこなった。調査以前の段階で、階段部の上り口付近は一定幅で道の形状が残っており、富士信仰碑1基が倒壊していた。調査の結果、階段施設を確認して、絵図等に描かれた具体的な状況を明らかにすることができた。階段上の平坦地の入口付近において、鳥居の確認作業をおこなったが、これに対応する遺構は検出されなかつた。小屋は登山道の付替えによって、地面を嵩上げして横道に間口を設けた状態に建て替えられている。その近代の遺構を調査したあとでそこを掘り下げて、近世段階の絵図に描かれたものと対応する遺構の検出に努めた。その結果、古い山小屋の掘っ建て柱が4本検出されたが、「明細図」、「真景之図」に描かれた小屋に対応するものとは言い切れない。

古い登山道は鈴原社の東側を登っていたが、現在の県道は同社の西側で左に折れて河原堀（富士火山地質図）沿いを二合目に延びている。

以上、登山道関連遺跡の一合目、鈴原社までの地点ごとの史料と発掘調査の成果をあわせて掲げてみた。これらの地点は、吉田口登山道の中でも拠点的な場所で、富士信仰が奉納物などのかたちをとつて確認されるところでもあり、その整備もすでに終了している。中世以降、わが国固有の信仰である富士信仰、とりわけ富士講の道として多くの人々が踏み分けたこの登山道は、今もその姿を良好にとどめており、日本を代表する靈山の参詣道としての面目を保つている重要な道であることに変わりはない。今後もこれから先の部分についての調査成果を積み重ねることによって、富士箱根伊豆国立公園の核地域ともいえるこの富士山内の自然と調和を図りながら、いっそうの歴史の道（吉田口登山道）の整備を進めていくことが求められている。

（堀内 真）